

51 徳川慶喜の奥医師の生誕地と

その周辺

木村 專太郎

はじめに

まず今年のNHK大河ドラマ第十五代将軍「徳川慶喜」の奥医師であつた高松凌雲の生家が福岡県小郡市古飯にある。またその直ぐ近くの佐賀に生まれた伊東玄朴（一八〇一—一八七二）佐野常民（一八二二—一九〇二）そして相良知安（一八三六—一九〇六）を紹介する。

高松凌雲について

高松凌雲は小郡古飯に生まれ江戸と大坂（適塾）で蘭医学を学び、徳川慶喜の奥医師になり、慶応三年（一八六七）に慶喜の弟徳川昭武に随行してフランスの博覧会に行き欧州各地を見聞する機会に恵まれた。とくにフランス・パリにある病院オテル・デュー（Hotel-Dieu）に暫く通い、フランス医学を見聞していた。しかし戊辰の役の報に接

し、急遽帰朝した。帰国したときには、江戸はすでに官軍の手に落ちており、凌雲は榎本武揚と共に海路北海道函館に逃れ、そこで歴史上有名な官軍と幕府軍の五陵廓の戦いに加わつた。そのとき凌雲は敵味方の区別なく、多くの負傷兵の救済にあつた。この時代の戦いでは、敵の捕虜、特に負傷者は殺すの常であつたことから、敵を助けることは非常に画期的なことであつた。またこの戦いで、彼は傷の治療にフェノールとある。かの有名な英国のリスターがフェノールを用いてその防腐法を発表したのはが一八六七年であるから、その翌年に日本において既にフェノールが使用されていたことは、全く驚異的なことである。

明治維新後は東京の浅草で開業し、後は上野に移り同愛社を設立した。東京市内の約60ヶ所に診療所を造つて貧しい人々の診療を行い、大正五年に八十一才の高齢で他界するまで、その数は百万人以上に達したと言われている。

高松凌雲生誕地の近くの佐賀の医師たち

※その一・伊東玄朴は現在全国的に非常に有名になつた

佐賀県の吉野ヶ里の近くの神埼郡仁比山村に生まれた。

彼は非常に苦学の末、シーボルト (Philipp Franz von Siebold 一七九六—一八六六) に師事して蘭学を修め、佐賀鍋島侯の御匙医となった。玄朴は江戸の地において開業し、東京大学医学部の前身となる「お玉ヶ池種痘所」を開設に尽力した中心人物であり、近代医学の恩人とも言うべき人であろう。

※その二・日本赤十字社の生みの親である佐野常民は佐賀県川副町早津江に生まれた。藩校の弘道館で学び、京都の広瀬元恭、大坂の適塾、さらに江戸の伊東玄朴で医学を学んだ。また常民長崎で砲術、航海、造船術を学び、藩の鉄砲、汽車、汽船の製造に従事し、国産初の蒸気船「凌風丸」も完成させた。明治維新後、政府に招聘され、海軍の創設に尽力し、日本海軍の基礎を確立させた。凌雲と共にパリの博覧会と明治六年(一八七三)ウィーンの大博覧会に赴いたとき、一八七〇年に創設された赤十字精神のことをよく学んでいた。明治二十年には日本赤十字社を設立し、初代社長に就任した。

※その三・相良知安は佐賀城下町に生まれた。明治維新

政府が西洋医学を導入するさいに、ほぼ決まりかけていた英国医学の代わりに、ドイツ医学の導入を進言し、成功させた。そのため彼は不幸な運命を辿った。

おわりに

徳川時代末期から明治にかけて活躍した福岡と佐賀の四人の医師が、非常に近い場所で生まれたことに因縁を感じ、発表する。

(福岡市・那珂川病院)